



水産庁
長官賞

全体効率化で魚価向上

浜の意識を変えた、

入札制導入の改革！



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

岸和田臨海地区 地域水産業再生委員会 (JF大阪鯉巾着網)

関係者からの反発を乗り越え、従来の相対取引から入札制へと転換。他県以上の魚価向上を実現し、漁業者の意識に大きな変化をもたらしている。

- ①生シラス丼 ②まき網漁の様子 ③電子入札の様子
- ④整備された荷捌き場 ⑤入札風景 ⑥漁協直営「泉州海鮮ちんちく家」
- ⑦地蔵浜みなとマルシェ

慣習的な相対取引から脱却し、魚価を向上させる必要

まき網や船びき漁でイカナゴやシラスを中心に水揚する大阪鯉巾着網漁業協同組合。荷揚げされる魚は、それまで相対取引によって流通されていた。一方、近隣の神戸港では同じ魚種が入札によって取引され、比べると2～3割も値段が高い状況にあった。低位で安定していた資源量を考えると、漁獲量を増やして魚価を高めるには限界があると判断、入札制度への切替えに取組まれることになった。

また、魚価を向上させるだけでなく、

新たな販路を開拓することでも収入を向上させる工夫が求められていた。

「荒療治」の競り導入は、魚価の向上とともに参加者が増加

薄利多売からの「荒療治」とも言われた入札制の導入は、当初、仲買からの反発や売れ残りリスクを心配する漁師からの声が多量に上がった。平成26年、説得を経て始めた競りには全68ヶ統のうち26ヶ統の参加に留まった。だが、魚価が他県に追いつく価格にまで向上。それを聞きつけた漁師たちが翌年、翌々年と集まり始め、平成28年には全ヶ統の参加

となった。それに伴い、新たに荷捌き場を整備し、水揚を集約。入札はこれまでの手書きではなく、電子入札で行われている。入札情報が漁をしている漁師のスマートフォンに送信され、値段が付いている魚がいる漁場が予測できるようになり、漁の効率化にも貢献している。

魚価が向上したのは取引形態の効果だけではない。次世代の活水器とも呼ばれる「デルカ」を導入し、漁獲物の鮮度向上にも努めたことも価格に反映された要因になっている。

直売により収益性を向上させる工夫も進められ、平成27年にオープ

した漁協直営の「泉州海鮮ちんちく家」、また、毎週日曜日に開催している「地蔵浜みなとマルシェ」は、地元客はもちろん多くの観光客でにぎわっている。さらに、関西空港から近い岸和田の立地特性を活かし、東京・福岡の飲食店へ「朝獲れシラス」を直接販売するなど、新たな販路を開拓することで所得向上にもつなげているところだ。

取引形態の変更というリスクも大きい改革を進めたことに加え、さらに収益性を向上させる多くの取組みにも果敢に挑んだ事例だ。

強力なリーダーシップが導いた目に見える効果

入札制度そのものの効果もさることながら、自らが先頭に立って必要な設備投資を進め、府下漁業者に呼び掛けを行った漁協のリーダーシップを他にして、当事例の成果を語ることはできないだろう。漁業所得の向上が大きな成果であることはもちろんのこと、大阪湾の漁師たちが一つになり、浜の現状を変えようという意識が高まったことが、この事例から見る最も大きな成果ではないだろうか。

表彰選定委員会でのコメント（一部抜粋）

「かなりの反対もあった中で当初の計画を実行した。従来の取引構造を改革させ、漁業者やメーカーに高度な取組を起こさせている。」

再生委員会 情報

- 委員会名：岸和田臨海地区地域水産業再生委員会 ●代表者：岡 修
- 構成メンバー：大阪府鯉巾着網漁業協同組合、岸和田市、大阪府
- 対象地域：岸和田市臨海地区 ●対象漁業：中型まき網漁業、船曳網漁業

浜プラン詳細

